

第1章 青森県の気候・風土・歴史

青森県には、10の市と22の町、8の村の計40市町村があり、三方を海に囲まれ、白神山地や十和田湖など美しく雄大な自然に恵まれるとともに、津軽半島や下北半島など地形の変化に富んでいます。令和5年10月1日現在の推計人口は、1,184,558人となっています。（青森県人口移動統計調査）

1 位置

青森県は、北緯40度12分から41度33分、東経139度30分から141度41分の間であり、ニューヨーク、北京、ローマ、マドリードとほぼ同緯度に位置しています。

本州の最北部にあり、南を岩手県・秋田県と接し、東に太平洋、西に日本海、北は津軽海峡・陸奥湾に面して北海道と向きあっています。



2 地勢と海

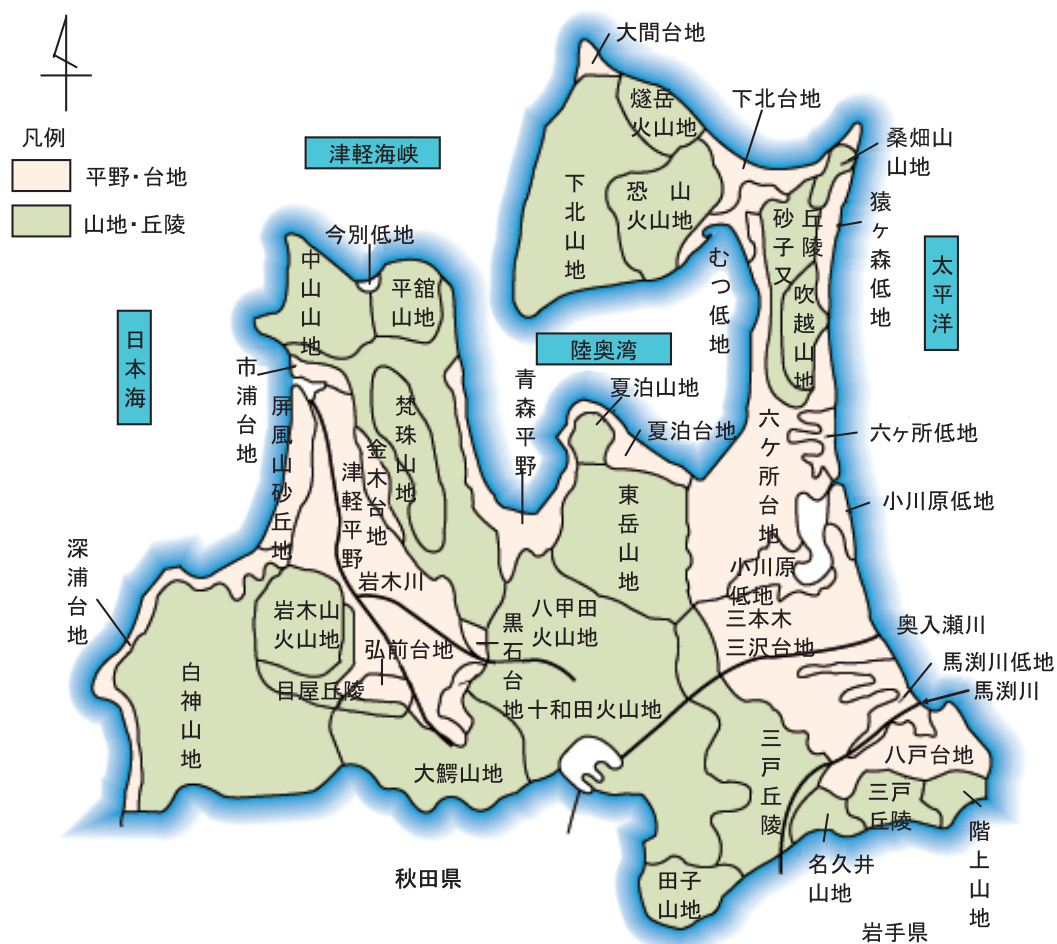
令和6年4月1日現在の青森県の面積は、9,645.12km²で、その約66%が森林です。

県には岩木山、八甲田山系、恐山山地など活火山が多くあり、中央部を奥羽山脈が縦走し、その北端部に当たる八甲田山系から夏泊半島、下北半島西部に至る中央山地を境にして、東部（県南）と西部（津軽）に二分されています。県南西部には、世界最大級のブナの原生林として世界自然遺産に登録された白神山地、そして標高1,625mの岩木山がそびえ、その裾野から広がる津軽平野より北に津軽半島が、北端には龍飛崎があります。

太平洋沿岸には日本最大の砂丘地帯・猿ヶ森砂丘が 17km 続き、県内で最も大きい湖である小川原湖（62km²）があります。その北部より下北半島となり、本州最北端に大間崎があります。

また、青森県は、日本海、津軽海峡および太平洋と三方を海に囲まれ、その中央に位置する大型内湾である陸奥湾では、全国でも有数のホタテガイ養殖が行われています。

青森県のまわりでは、日本海を対馬海流(暖流)が北上し、その一部が津軽海峡に入って津軽暖流となり、太平洋を南下しています。太平洋の沖合では、この津軽暖流と北からの親潮(寒流)、南からの黒潮(暖流)の流れがぶつかりあっています。暖流と寒流がぶつかりあう海域には魚の餌となるプランクトンがたくさん発生し、多くの魚が集まってきて豊かな漁場がつくられています。



(資料：東北地質調査業協会参考) (出典：図説 農林水産業の動向令和3年度版)

3 気候

青森県は、三方を海に囲まれ、県の中央部に位置する八甲田山系が県内を二分していることなどから、複雑な海域や地形を形成し、地域によって気候が大きく異なります。

気候の特徴として、冬の日本海側の大雪と夏の太平洋側の**偏東風（ヤマセ）**があげられます。冬は全市町村が豪雪地帯に指定されるほど降雪が多く、特に日本海側では、冷たく湿った空気が八甲田山系にぶつかり、大雪を降らせる一方で、太平洋側では、八甲田山系が障壁となって乾燥した晴天の日が多くなります。

また、夏は、太平洋側では冷たく霧を伴ったヤマセのために低温多湿の日が多くなる一方で、日本海側では夏らしい日が多くなります。

青森県はこのような複雑な気候によって、地域毎・季節毎に移り変わる美しい自然を味わうことができます。



4 歴史と風土

青森県は、日本海側の津軽地方と太平洋側の県南地方で大きく気候が異なるため、生産される農作物の違いや、歴史的に異なる文化が培われてきました。

1) 津軽地方

津軽地方は、弘前市を中心とした「中南津軽地域」、五所川原市を中心とした「西北津軽地域」、青森市を中心とした「東青津軽地域」の3つの地域で構成され、岩木川がつくる豊かな大地、津軽平野を中心に栄えてきました。

① 歴史

中世には岩木川河口の十三湊とさみなとが貿易で活況を呈し、北海道と本州との交易拠点として栄えました。その後、江戸時代には日本海側の鱒ヶ沢・深浦などが北前船の寄港地となって栄え、特に、鱒ヶ沢は津軽産米の積出港として、最も重要視されました。内陸では、弘前城を中心に城下町が築かれ、明治の廃藩置県により県庁が青森市に置かれるまで、弘前が津軽の中心都市でした。

② 文化・観光

「青森ねぶた」「弘前ねぶた」「五所川原立佞武多たちねぶた」など夏の祭りが定着していますが、地面に積もった粉雪が強風で舞い上がる地吹雪を体験できる「地吹雪体験ツアー」も冬の風物詩となっています。

世界遺産となった白神山地など雄大な自然や、日本最大級の縄文時代の遺跡などを有する津軽地方は、観光地として集客能力を増しています。

③ 農林水産物

津軽地方で生産される主な農産物にはりんご、米、メロン、すいかなどがあります。生産量全国一位のりんごは、弘前市一円の中南津軽地域で特に多く作られています。五所川原市周辺の西北津軽地域では、砂地の特性を生かしたメロンやすいかなども生産されています。また、津軽半島北部に位置する十三湖は良質な大和しじみの主産地として注目を集めています。

2) 県南地方

県南地方は、八戸市を中心とした「三八地域」、十和田市を中心とした「上北地域」、むつ市を中心とした「下北地域」の3つの地域で構成されています。

① 歴史

南部氏の領地として発展してきた県南地方は、かつて南部駒（馬）の生産地として知られ、各地に牧場がありました。

七戸町、三戸町などには城が建築され城下町として、また奥州街道の宿場町として、物資の往来も盛んでした。

また、明治期以降は太平洋航路の拠点として八戸市が港として栄え、現在も国内有数の漁業基地となっています。

② 文化・観光

「三社大祭」さんしゃたいさい「えんぶり」は歴史ある祭りとして有名です。県南地方を中心に行われる冬の伝統行事である「えんぶり」は、昭和54年には国の重要無形民俗文化財に指定されています。また、農家では母屋うまやと馬のいる厩うまやがつながった「南部曲家」なんぶまがりやと呼ばれる独特の建築様式が見られ、馬を家族のように大切に扱

う文化がありました。

かまぶせやま
釜臥山を最高峰とする恐山山地が広がる下北半島は、ニホンザル、ツキノワグマ、ニホンカモシカなどの北限生息地となっています。

③ 農林水産物

県南地方では豚、鶏、牛などの畜産農家が多く、また、ヤマセの影響を受けにくい作物として、ながいも、にんにく、ごぼうなどの根菜類が多く作付けされています。また、八戸港を中心に、スルメイカやサバなどの漁業が盛んな地域でもあります。